

Tさんはあきらめなかつた。

「征三さん獨特のものを創ろう！普通の“反対運動のための絵本”ではなくて！」と、真剣に出版に寄り添ってくれた。森で自然破壊、一方、都會では大量生産→大量消費→大量投棄そして焼却によるダイオキシンPCBが発生、環境汚染が進んでいた。森から、都會から、真ん中のページに巨大処分場。このアイデアは斬新な絵本となり、中国と韓国でも出版されている。しかもこの絵本には、「あなたも共同地主になれます」というリーフレットまではさみこまれている。この絵本の印税とリーフレットの拡散により「日の出の森トラスト運動」は全国に広がったのだった。

第二冊目の「たすけて」は、2年後1995年8月に出版された。ことば（文章）文字を田島が担当。写真は主に宮入芳雄さん【最近出版した「高尾山昆虫記」（文・写真宮入芳雄）は、素晴らしい本です。この日の出のニュースでも取り上げてほしい。】。

そして、四半世紀の月日が経って、第三冊目の絵本が出ることになった。

この絵本のことを考える時、1960年の安保闘争に遡らなければならない。ぼくは20才、美大の学生だった。毎日、国会にデモに行き、右翼の襲撃、警官隊と鬭った。だが「自然承認」という結末で安保は国会を通過、大学では「安保の総括」と称する議論、論争の日々の中、説得力のある論客が学生たちの尊敬を集めていた。だが、彼らの絵を見ると、個性のない説明的なくだらない絵ばかり！「こんなになってたまるか！」政治的な関心を持ち、社会的な活動を続けていたら、最低のアーティストになってしまふ。そう決めつけたぼくは、絵だけを描く男になった。

数年の歳月が過ぎた。その間ベトナムではアメリカの侵略に対する激しい戦いが繰り広げられていた。ぼくは無関心を装っていた。

そしてある日、アパートの玄関にあった新聞の小さな記事が目に止まった。サイゴンの路上で殺された解放軍兵士の背嚢から絵筆や絵の具が出てきたという。この青年はベトナムのぼくだ！

日米安保協定が結ばれることにより、日本の基地を利用して米軍はベトナムの人々を殺していた。もう無関心ではいられない。政治に熱心な人々の反戦運動ではなく、普通の市民に向けた活動をと考えた。当時、日本で一番人通りの多かった西銀座サテライト前の広場にB全パネルの絵を並べる「野外展」を始めた。ここで、ぼくは初めて反戦という目的を持ったアートすなわちベクトルの強い作品制作に向き合うことになった。

次号に続く